

フランクファート型事例のその後 (2) ¹

井保 和也

5. フランクファートに対する第3の反論

5.1. タイミング

次に、ギネットによる反論を見ることにしよう²。ギネットは特にペレブームが考案した事例8を批判している。

ギネットは事例8がケインとウィダカーのジレンマの第1の角を回避していることは認める。なぜなら、事例8においては、ジョーンズが道徳的理由に十分な注意を払うかどうかは因果的に決定されているわけではないため、非両立論が偽であることを暗黙裡に前提としてしまうという論点先取の誤謬は犯されていないからである。しかし、ギネットによれば、事例8はジレンマの第2の角を回避することには成功していない。つまり、ギネットの考えでは、事例8のジョーンズがスミスを殺害したことの道徳的責任を負うのは、事例8のジョーンズに強固な別可能性があるからなのである。

では、事例8のジョーンズに強固な別可能性があると言えるのはなぜだろうか。この点を説明するために、ギネットは次の事例9を検討する³。

[事例9]

ジョーンズはある時刻 T1 にスミスを殺害するべきかどうかを考えている。ジョーンズが T1 にスミスを殺害しないのは、ジョーンズがある時刻 T0 から T1 のどこかで道徳的理由に十分な注意を払う場合のみである。ジョーンズ自身もそのことに気付いている。また、T0 から T1 の間、ジョーンズはいつでも自発的に道徳的理由に十分な注意を払うことができる。つまり、T0 から T1 を通じて、ジョーンズが道徳的理由に十分な注意を払うかどうかはあらかじめ因果的に決定されているわけではない。それは完全にジョーンズ次第である。ただし、たとえジョーンズが T0 から T1 のどこかで道徳的理由に十分な注意を払ったとしても、ジョーンズが T1 にスミスを殺害する可能性は残されている。なぜなら、仮にジョーンズが T0 から T1 のどこかで道徳的理由に十分な注意を払ったとしても、その後、ジョーンズは T1 にスミスを殺害するかどうかを自発的に選択することができるからである(ただし、これはブラックとその装置が存在しない場合である)。しかし、ジョーンズは知らなかったのだが、ジョーンズが T1 にスミスを殺害することを確

実にするために、ブラックがジョーンズの脳に装置を埋め込んでいた。その装置は、ジョーンズが T0 から T1 のどこかの時刻で道徳的理由に十分な注意を払った場合、それを検知し、ジョーンズの脳の適切な部位を刺激することで、ジョーンズが T1 にスミスを殺害することを確実にするのである。

さて、実際に起こったことは次の通りである。T0 から T1 の間、ジョーンズは道徳的理由に十分な注意を払わなかったため、T1 に自らスミスを殺害した。もちろん、その間、ブラックの装置は作動しないままだった。

一見すると、事例 9 は強固な別可能性原理 3 の反例になっているように思われる。なぜなら、事例 9 においては、非両立論が偽であることは前提とされておらず、さらに、ジョーンズは強固な別可能性を持たないが、それにもかかわらず、ジョーンズはスミスを殺害したことに關する道徳的責任を負っているように思われるからである。しかし、ギネットによれば、事例 9 は強固な別可能性原理 3 の適切な反例ではない。

まず、ギネットは次の点を指摘する。事例 9 においては、仮定より、T0 から T1 を通じて、ジョーンズはいつでも自発的に道徳的理由に十分な注意を払うことができる。そこで、ジョーンズがまさに T1 の瞬間に道徳的理由に十分な注意を払ったとしよう。この場合、ジョーンズがスミスを殺害するのは、T1 より後のある時刻 T2 になるはずである。なぜなら、ジョーンズが道徳的理由に十分な注意を払い、ブラックの装置が作動し、ジョーンズがスミスを殺害するという一連のプロセスが進行するには、一定の時間が必要になるからである。

この点に注目した上で、ギネットは次のように主張する。たしかに、事例 9 においては、ブラックの装置が存在するために、ジョーンズは T2 までのどこかの時刻で必ずスミスを殺害することになる。言い換えれば、ジョーンズは「T2 までのどこかの時刻でスミスを殺害する」という行為とは別の行為を自発的に行うことができなかったのである。この意味では、事例 9 のジョーンズには強固な別可能性はなかったと言ってよい。ところが、上述の通り、事例 9 においては、たとえブラックの装置が存在しているとしても、ジョーンズは T1 ではなく T2 にスミスを殺害することもできたはずである。言い換えれば、ジョーンズは「T1 にスミスを殺害する」という行為とは別の行為を自発的に行うことができたのである。この意味では、事例 9 のジョーンズには強固な別可能性があったと言わなければならない⁴。そして、ギネットによれば、事例 9 において、スミスを殺害したことに關する道徳的責任がジョーンズにあるように思われるのは、ジョーンズに「T1 にスミスを殺害する」という行為に關する強固な別可能性があるからなのである。したがって、事例 9 は強固な別可能性原理 3 の反例としては適切ではない。事例 9 が強固な別可能性原理 3 の反例であるように見えたのは、我々が「T1 にスミスを殺害する」という行為を「T2 までのどこかの時刻でスミスを殺害する」という行為と混同したために過ぎない。

ここで、事例 8 にもどろう。ギネットの見解では、事例 8 についても事例 9 と同じこと

が言える。事例8が強固な別可能性原理3の反例であるように見えるのは、事例8では、ジョーンズが道徳的理由に十分な注意を払う「タイミング」(timing)によって生じる殺害時刻の違いが無視され、「T1にスミスを殺害する」という行為が「T2までのどこかの時刻でスミスを殺害する」という行為と混同されているからなのである⁵。しかし、タイミングを考慮して事例8を修正すると、事例8は事例9になる。したがって、ギネットは事例8のジョーンズには強固な別可能性があると主張するのである。

5.2 不確定的な記述と確定的な記述

ひょっとすると、ギネットの反論に対して、次のような疑問を抱くかもしれない。ギネットによれば、事例9のジョーンズは、「T2までのどこかの時刻でスミスを殺害する」という行為に関しては強固な別可能性を持たず、「T1にスミスを殺害する」という行為に関しては強固な別可能性を持つ。もしこれが本当であるならば、事例9のジョーンズは「T2までのどこかの時刻でスミスを殺害する」という行為に関する道徳的責任は負わないが、「T1にスミスを殺害する」という行為に関する道徳的責任を負うことになる。しかし、これは奇妙ではないだろうか。

もう少し詳しく考えてみよう。ギネットは事例9におけるジョーンズの行為を記述するために二つの記述を用いている。一つは「T2までのどこかの時刻でスミスを殺害する」という記述であり、もう一つは「T1にスミスを殺害する」という記述である。これらは同一の行為トークンに関する二つの異なる記述である。前者の記述は時刻が不確定的だが、後者は時刻が確定的であるという点で異なっている。では、ある行為者が、ある同一の行為トークンに関して、不確定的な記述の下では道徳的責任を負わないが、確定的な記述の下では道徳的責任を負うということは、あり得ることなのだろうか。直観的にはあり得ないように思われるかもしれない。

しかし、ギネットによれば、これはよくあることである。ギネットは次のような例を挙げている⁶。現在、私は京都大学の構内にいる。このことは、現在、私が地球の中心から1万キロメートル以内のどこかにいることを含意する。ところで、私は地球の中心から1万キロメートル以内のどこかにいることに関する道徳的責任は負わないだろう。なぜなら、私は地球の中心から1万キロメートルより遠くに行くことができないからである。しかし、特殊な事情がないかぎり、私は京都大学の構内にいることに関する道徳的責任を負うだろう。なぜなら、私は京都大学の構内から外に出ることができるからである。

このように、ある行為者が、ある同一の行為トークンに関して、不確定的な記述の下では道徳的責任を負わないが、確定的な記述の下では道徳的責任を負うということは、十分にあり得ることなのである。したがって、ギネットの反論が想定している状況は決して奇妙ではない。

5.3. ペレブームによる応答

ペレブームはギネットの批判に対して次のように応答する⁷。ギネットによれば、事例9において、ジョーンズがスミスを殺害したことに関する責任を負うのは、ジョーンズが「T1にスミスを殺害する」という行為に関して強固な別可能性を持っていたからである。しかし、ペレブームの考えでは、これは間違っている。この点を説明するために、ペレブームは次の事例10を提示する⁸。

〔事例10〕

ジョーンズはブラックに洗脳されているため、T0 から T2 のどこかで必ずスミスを殺害する。しかし、T0 から T2 のどこでスミスを殺害するかはジョーンズ次第である。もちろん、ジョーンズは自分が洗脳されていることを知らない。

T0 と T2 の間のある時刻 T1 になると、ブラックが洗脳した通りに、ジョーンズはスミスを殺害した。

事例10においては、仮定より、T0 から T2 のどこでスミスを殺害するかはジョーンズ次第である。つまり、ジョーンズは「T1にスミスを殺害する」という行為に関しては別可能性を持っていたのである。それにもかかわらず、スミスを殺害したことに関する道徳的責任はジョーンズにはないように思われる。ペレブームによれば、このことは、ジョーンズが「T1にスミスを殺害する」という行為に関して別可能性を持っていることは、ジョーンズがスミスを殺害したことに関する道徳的責任を負うための十分条件ではないということの意味している。

ペレブームの見解では、同じことは事例9についても言える。つまり、事例10と同様に、事例9においても、ジョーンズが「T1にスミスを殺害する」という行為に関して別可能性を持っていることは、ジョーンズがスミスを殺害したことに関する道徳的責任を負うための十分条件ではないのである。そうであるならば、事例9のジョーンズが「T1にスミスを殺害する」という行為に関して強固な別可能性を持っているという事実に訴えるだけでは、事例9のジョーンズがスミスを殺害したことに関する責任を負っているということを示すことはできないはずである。このことを示すためには、事例9のジョーンズが「T1にスミスを殺害する」という行為に関する強固な別可能性とは別の何かを持っていることが必要である。これはギネットの主張に反する。したがって、ペレブームはギネットの反論は成功していないと結論付けるのである。

6. フランクファートに対する第4の反論

最後に、「新傾向性主義」(new dispositionalism)と呼ばれる立場を支持する論者の反論を見ることにする。しかし、その前に、新傾向性主義について簡単に説明しておく必要があるだろう。そこで、本節の6.1. から6.4. までは、新傾向性主義がどのような立場であ

るかを解説する。次に、6.5. では、新傾向性主義がフランクファートに対してどのような批判を展開するかを確認する。そして、6.6. では、新傾向性主義の批判に対する応答を検討する。

6.1. ムーアの古典的両立論

かつて、ムーアは「実際に行った行為とは別の行為を行う余地があった」という意味での自由、すなわち、余地自由が決定論と両立することを示すために、「傾向性」(disposition) という概念に訴えた⁹。本稿では、こうした戦略を「古典的両立論」(classical compatibilism) と呼ぶことにしよう。

ムーアが活躍していた当時、傾向性という概念は次の「単純条件文分析」(Simple Conditional Analysis; 以下 SCA) によって定義されていた。

SCA : 「ある時刻 T において、ある存在者 O にはある振る舞い A をする傾向性がある」が真であるのは、「もし T にある条件 C が成立したならば、O は A するだろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。

例えば、「今あのグラスには割れる傾向性がある」が真であるのは、「もし今あのグラスがテーブルから落下するなどすれば、割れるだろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。もちろん、慎重に管理されることで、生成から消滅まで一度も割れないグラスが存在する可能性もある。それでも、そのグラスは割れる傾向性を持っている。なぜなら、SCA によれば、「もし今あのグラスがテーブルから落下すれば、割れるだろう」という反事実的条件文が真でありさえすれば、そのグラスが実際にテーブルから落下するかどうかとは無関係に、そのグラスは割れる傾向性を持っていると言ってよいからである。一度も割れないグラスは、割れる傾向性を持たないのではなく、割れる傾向性を発揮していないだけなのである。これは直観的に正しいように思われる。

すでに述べたように、ムーアは余地自由を傾向性の一種と考えた。つまり、グラスが割れる傾向性を持つと同様に、砂糖がコーヒーに溶ける傾向性を持つと同様に、蛾が光に集まる傾向性を持つと同様に、行為者は余地自由を持つのである。そこで、ムーアは SCA に従って、余地自由を次のように定義した。

〈ムーアによる余地自由の定義〉

「ある時刻 T において、ある行為者 X にはある行為 A とは別の行為を行う余地があった」が真であるのは、「もし T に X が A とは別の行為を行うことを試みていたならば、X は A とは別の行為を行っていただろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。

ムーアの見解では、我々が「ある行為者 X にはある時刻 T にある行為 A とは別の行為を行う余地があった」と言う場合、我々はそれによって常に「もし X が T に A とは別の行為を行うことを試みていたならば、X は A とは別の行為を行っていただろう」という反事実的条件文を意味している。例えば、ジョーンズはある時刻 T にある部屋にいたとしよう。この場合、特殊な事情がないかぎり、ジョーンズは T にその部屋にいたことに関して道德的責任を負うだろう。なぜなら、「ジョーンズは T にその部屋から出ることもできた」、すなわち、「もしジョーンズが T にその部屋から出ることを試みていたならば、ジョーンズはその部屋から出た」はずだからである。一方で、ジョーンズはある時刻 T にある部屋に監禁されていたとしよう。この場合、ジョーンズは T にその部屋にいたことに関して道德的責任を負わないだろう。なぜなら、「ジョーンズは T にその部屋から出ることができなかった」、すなわち、「たとえジョーンズが T にその部屋から出ることを試みていたとしても、ジョーンズはその部屋から出なかった」はずだからである。

ここまでの議論が正しいならば、余地自由は決定論と両立する。今述べたように、ムーアは余地自由を傾向性の一種と見なしている。当然のことながら、ある存在者が何らかの傾向性を持つことは決定論と両立する。例えば、グラスが割れる傾向性を持っていることと決定論はまったく矛盾しない。ムーアによれば、これとまったく同様に、ある行為者が余地自由を持つことは決定論と両立するのである。

6.2 単純条件文分析の反例

ムーアの古典的両立論は一世を風靡したが、1970 年代にはほとんど完全に放棄されるようになった。その原因の一つとして考えられるのは、古典的両立論が依拠している傾向性の SCA が原理的に誤っていると考えられるようになったことである¹⁰。そのきっかけを作ったのは、マーティンが考案し、ルイスが洗練化した次の二つの反例である¹¹。

[事例 11]

ある魔法使いがあるグラスを非常に気に入った。しかし、そのグラスは大変割れやすい。そこで、魔法使いは常にそのグラスを見張り、そのグラスがテーブルから落下したときには、そのグラスが割れないように、そのグラスを頑丈にする呪文を即座に唱えることにした。

[事例 12]

ある魔法使いが目の前のグラスを指さしながら、あなたに次のように言った。「今からそのグラスを割れないようにしよう。しかし、君がそのグラスに石を投げたときだけ、そのグラスを再び割れるようにしよう。」そう言うと、魔法使いはそのグラスを溶かし始めた。あなたは試しにそのグラスに石を投げてみた。すると、そのグラスは石がぶつかる直前に冷えて凝固し、石はそのグラスを割った。その後、そ

のグラスはまた溶け始めた。あなたが何度石を投げて、同じことが起こった。

事例 11 においては、グラスには割れる傾向性があるが、テーブルから落下しても割れない。一方で、事例 12 においては、グラスには割れる傾向性がないが、石がぶつかると割れる。これらのことは、「もしある時刻 T にある条件 C が成立したならば、ある存在者 O はある振る舞い A をするだろう」が真であることが、「T において、O には A する傾向性がある」が真であるための必要条件でも十分条件でもないことを示しているのである。

これらの反例によって、SCA は否定された。そして、これによって、ムーアの古典的両立論は放棄されてしまった。しかし、ルイスらの貢献によって、傾向性という概念の分析はそれ以降も発展し続けることになる。

6.3. 単純条件文分析の修正

では、ルイスらは傾向性の概念分析をどのようにして展開したのだろうか。ルイスによれば、SCA の二つの反例は次のことを示唆している。ある存在者がある傾向性を持つのは、その存在者がその傾向性の因果的な基盤となる何らかの内在的性質を持つことによってである。そして、ある存在者がある傾向性を獲得したり、失ったりするのは、そうした内在的性質が変化するからなのである。そこで、ルイスは SCA を修正し、次の「修正条件文分析」(Lewis's Reformed Conditional Analysis; 以下 LCA) を提案する¹²。

LCA : 「ある時刻 T において、ある存在者 O にはある刺激 S に対してある反応 R を返す傾向性がある」が真であるのは、「もし O が T に S を受け、かつ、O が T にある内在的性質 B を持つならば、O が T に S を受けることが、O が T に B を持つことと合わさって、O が R を返すことの完全な原因になるだろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。

LCA が SCA の二つの反例を克服していることは広く認められている。しかし、LCA にも次の二つの反例があることが指摘されている¹³。

[事例 13]

ある魔法使いがあるグラスを非常に気に入った。しかし、そのグラスは大変割れやすい。そこで、魔法使いは常にそのグラスを見張り、そのグラスがテーブルから落下したときには、そのグラスが割れないように、そのグラスが落下する地面を柔らかいマットレスにする呪文を即座に唱えることにした。

[事例 14]

ある魔法使いがテーブルの上にあるコンクリートのブロックを指さしながら、あ

あなたに次のように言った。「そのブロックはガラスとは違い非常に頑丈だ。しかし、君がそのブロックをテーブルから落下させたときだけ、そのブロックが割れるようにしよう。」あなたは試しにそのブロックをテーブルから落下させてみた。すると、魔法使いは呪文を唱えて地面をダイヤモンドに変え、落下している最中のブロックに向かって急上昇させた。ブロックは急上昇するダイヤモンドの地面と衝突し、割れた。

事例 13 においては、ガラスには割れる傾向性があり、かつ、ガラスの内在的性質は一切変化していないが、テーブルから落下しても割れない。一方で、事例 14 においては、コンクリートのブロックには割れる傾向性はなく、かつ、コンクリートのブロックの内在的性質は変化していないが、テーブルから落下すると割れる。これらのことは、「もしある存在者 O がある時刻 T にある刺激 S を受け、かつ、O が T にある内在的性質 B を持つならば、O が T に S を受けることと O が T に B を持つことの組み合わせが、O がある反応 R を返すことの完全な原因になるだろう」が真であることが、「T において、O には S に対して R を返す傾向性がある」が真であるための必要条件でも十分条件でもないことを示しているのである。

これを受けて、マンリーとワーサーマンは次の「割合分析」(以下 PROP) を提案している¹⁴。

PROP : 「ある存在者 O にはある出来事 S が生じるときにある振る舞い R をする傾向性がある」が真であるのは、「S が生じるすべての事例のうち、適切な割合の事例において、O は R するだろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。

PROP の特徴は、傾向性を分析する際に「割合」(proportion) を用いることである。これによって、PROP は SCA や LCA が抱えていた困難を克服することが可能になる。なぜなら、SCA や LCA とは違い、PROP はある出来事 S が生じるすべての事例において例外なくある存在者 O がある振る舞い R をすることを要求しないからである。しかし、それと引き換えに、PROP は二つの曖昧な点を抱えこむことになる。一つは「ある出来事 S が生じるすべての事例」がどこまで及ぶのかという点であり、もう一つは「適切な割合」がどの程度の割合なのかという点である。とはいえ、マンリーとワーサーマンはこれらの点に関して楽観的で、「ある出来事 S が生じるすべての事例」と「適切な割合」は文脈によって決まると考えている。つまり、分析の対象である傾向性がガラスのもろさなのか、砂糖の水溶性なのか、蛾の走光性なのかに応じて、「ある出来事 S が生じるすべての事例」と「適切な割合」は変化するのである。

6.4 ヴィーヴリンの新傾向性主義

すでに述べたように、ムーアの古典的両立論が頓挫した原因の一つとして考えられるのは、それが依拠している SCA が原理的に誤っていると考えられるようになったからだ。しかし、余地自由を傾向性の一種と見なすことで、余地自由が決定論と両立することを示そうとするムーアのプロジェクトそのものは間違っていないのではないだろうか。そうであるならば、今や我々の手には SCA よりも洗練された LCA や PROP があるのだから、ムーアのプロジェクトを完遂することができるのではないだろうか。このように考えるのが新傾向性主義である。新傾向性主義に分類することができる論者は何人かいるが、その中でもヴィーヴリンは新傾向性主義を最も体系的に展開している¹⁵。そこで、ここではヴィーヴリンの新傾向性主義を簡単に見ていくことにしたい。

まず、ヴィーヴリンは LCA と PROP のそれぞれに傾向性の分析として不十分な点があることを指摘する¹⁶。LCA によれば、「ある時刻 T において、ある存在者 O にはある刺激 S に対してある反応 R を返す傾向性がある」と言ってよいのは、「O が T に S を受け、かつ、O が T に B を持つ」すべての場合に例外なく「O が T に S を受けることが、O が T に B を持つことと合わさって、O が R を返すことの完全な原因になる」ときだけである。この要求は強すぎる。すでに述べたように、PROP はこうした強すぎる要求をすることはしない。しかし、LCA とは違い、PROP は傾向性の因果的な基盤となる内在的性質に一切言及しない。ヴィーヴリンによれば、傾向性に関する我々の日常的な理解にとって、内在的性質は重要な役割を果たしている。したがって、その点に言及しない PROP は我々が持つ傾向性の概念の正しい分析とは言えない。これらの点を踏まえて、ヴィーヴリンは LCA と PROP を組み合わせて、次の「修正条件文 - 割合分析」(以下 LCA-PROP) を提案する¹⁷。

LCA-PROP : 「ある時刻 T において、ある存在者 O がある刺激 S にある反応 R を返す傾向がある」が真であるのは、「O が T に S を受け、かつ、O が T にある内在的性質 B を持つすべての事例のうち、適切な割合の事例において、O が T に S を受けることが、O が T に B を持つことと合わさって、O が R を返すことの完全な原因になるだろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。

ヴィーヴリンの見解では、LCA-PROP は非常に複雑な分析になっているが、それによって、LCA と PROP のそれぞれが抱えていた問題を解決することができる。

次に、ヴィーヴリンはこの LCA-PROP に従って、余地自由を次のように定義する¹⁸。

〈ヴィーヴリンによる余地自由の定義〉

「ある時刻 T において、ある行為者 X にはある行為 A とは別の行為を行う余地があった」が真であるのは、「X が T に A とは別の行為を行うことを試み、かつ、X

がTにある内在的性質Bを持つすべての事例のうち、適切な割合の事例において、XがTにAとは別の行為を行うことを試みるのが、XがTにBを持つことと合わさって、XがAとは別の行為を行うことの完全な原因になるだろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかぎられる。

もちろん、ムーアによる余地自由の定義が決定論と両立するのとまったく同じ理由から、ヴィーヴリンによる余地自由の定義も決定論と両立する。こうして、ヴィーヴリンは1970年代以降放棄されていたムーアのプロジェクトを引き継ぎ、ムーアの古典的両立論を新傾向性主義として復活させたのである。

6.5. ブラックと魔法使い

ヴィーヴリンは自身が打ち立てた新傾向性主義の観点から、フランクファート型事例に対する反論を展開している¹⁹。ここでは、その反論を概観することにしよう。

まず、ヴィーヴリンはフランクファートが次のような推論を行っていることを指摘する（ここでは、「スミスを殺害する意志を抱き、スミスを殺害すること」をAと略記する）。

〈フランクファートの推論〉

- ① 事例1のジョーンズはAした。そして、事例1のジョーンズは、「Aとは別の行為を行う余地」も含め、Aに関する道徳的責任を負うために必要であると考えられるものをすべて持っていた。
- ② 事例3のジョーンズはブラックによって「Aとは別の行為を行う余地」を奪われていた。
- ③ 事例3において、ブラックは装置を稼働させなかった。そのため、事例3のジョーンズは事例1のジョーンズとまったく同じ内在的性質を持っていて、かつ、事例3のジョーンズは事例1のジョーンズとまったく同じ理由からまったく同じ行為を行った。
- ④ 同じ内在的性質を持ち、かつ、まったく同じ理由からまったく同じ行為を行った2人の行為者は、その行為に関してまったく同じ程度の道徳的責任を負う。
- ⑤ したがって、事例3のジョーンズはAに関する道徳的責任を負う。

その上で、ヴィーヴリンは推論の前提である①から④の真偽を検討する。①と③は事例1と事例3のそれぞれに含意されていることであるから、否定できない。また、④は道徳的責任が行為者の内在的性質、行為者が行為を行った理由、行為者が行った行為の三つにスーパーヴィーンすることを意味している。これは直観的に正しいように思われる。

ところが、ヴィーヴリンの見解では、②は偽である。ヴィーヴリンはムーアの方針を受け継いで余地自由を傾向性の一種として定義している。そして、ヴィーヴリンの LCA-

PROPによれば、ある存在者がある傾向性を持つことは、その存在者がその傾向性の因果的な基盤となる何らかの内在的性質を持つことに依存する。したがって、事例3において、ブラックがジョーンズから「Aとは別の行為を行う余地」を奪うためには、ブラックはジョーンズの内在的性質を改変する必要がある。しかし、事例3において、ブラックはジョーンズの内在的性質に何の影響も及ぼしていない。さらに、事例1のジョーンズには「Aとは別の行為を行う余地」がある。そうであるならば、事例3のジョーンズにも「Aとは別の行為を行う余地」があると言わざるを得ない。よって、②は偽である。

もし②が偽であるならば、フランクファートは結論である⑥を導き出すことはできない。このことは、事例3が強固な別可能性原理3の反例になっていないことを意味している。ヴィーヴリンによれば、フランクファートの議論が失敗するのは、事例3のブラックがSCAの反例である事例11および事例12の魔法使いとまったく同じ役割を果たしているからである。LCA-PROPは事例SCAの二つの反例に対処するために提示されたものであり、ヴィーヴリンによる余地自由の定義はLCA-PROPと論理的に同じ形式である。ヴィーヴリンによる余地自由の定義がフランクファートの事例3に対処することができるのは、当然である。

6.6. クラークによる応答

ヴィーヴリンのフランクファートに対する反論には、論理的な瑕疵は見当たらない。したがって、ヴィーヴリンの新傾向性主義が正しいならば、ヴィーヴリンの反論は成功していることになるだろう。しかし、ヴィーヴリンの新傾向性主義は本当に正しいのだろうか。たしかに、ヴィーヴリンの新傾向性主義はムーアらの古典的両立論が抱えていた最大の難点、すなわち、古典的両立論が依拠しているSCAが原理的に誤っているという難点を克服している。しかし、クラークの見解では、新傾向性主義は古典的両立論が抱えていたすべての難点を克服しているわけではない²⁰。

ムーアによれば、「ある時刻Tにおいて、ある行為者Xにはある行為Aとは別の行為を行う余地があった」が真であるのは、「もしTにXがAとは別の行為を行うことを試みていたならば、XはAとは別の行為を行っていただろう」が真である場合であり、かつ、その場合にかざられる。しかし、この余地自由の定義には次のような反例があることが知られている²¹。

[事例15]

ダニエルの目の前には深い崖がある。ダニエルはその崖の向こう側に行く必要がある。ダニエルがその崖の向こう側に行くには、その崖に架かっている橋を渡るしかない。その橋は極めて丈夫で、崩落することはない。また、その橋は安全に配慮した構造になっているため、その橋を渡る人が誤って転落することもない。ダニエルはこれらのことを十分に理解している。しかし、ダニエルは極度の高所恐怖症の

ため、橋を渡ろうと試みるのが心理的に不可能だった。結局、ダニエルはある時刻 T に橋を渡ることを諦め、崖の向こう側には行かなかった。

事例 15 においては、「ダニエルは T に橋を渡ることもできた」は偽であるように思われる。なぜなら、仮定より、ダニエルは橋を渡ろうと試みるのが心理的に不可能だったからである。その一方で、「もしダニエルが T に橋を渡ることを試みていたならば、ダニエルは橋を渡っただろう」は真であるように思われる。このことは、「もし T に X が A とは別の行為を行うことを試みていたならば、X は A とは別の行為を行っていただろう」が真であることは、「T において、X には A とは別の行為を行う余地があった」が真であることの十分条件ではないことを意味している。したがって、ムーアによる余地自由の定義は誤っている。

クラークの見立てでは、ヴィーヴリンによる余地自由の定義もこれと同じ難点を抱えている。つまり、事例 15 はヴィーヴリンによる余地自由の定義の反例にもなるのである。すでに述べたように、事例 15 においては、「ダニエルは T に橋を渡ることもできた」は偽であるように思われる。その一方で、「ダニエルが T に橋を渡ることを試み、かつ、ダニエルが T にある内在的性質 B を持つすべての事例のうち、適切な割合の事例において、ダニエルが T に橋を渡ることを試みるのが、ダニエルが T に B を持つことと合わさって、ダニエルが橋を渡ることの完全な原因になるだろう」は真であるように思われる。このことは、「X が T に A とは別の行為を行うことを試み、かつ、X が T に B を持つすべての事例のうち、適切な割合の事例において、X が T に A とは別の行為を行うことを試みることが、X が T に B を持つことと合わさって、X が A とは別の行為を行うことの完全な原因になるだろう」が真であることが、「T において、X には A とは別の行為を行う余地があった」が真であることの十分条件ではないことを意味している。したがって、ヴィーヴリンによる余地自由の定義は誤っている。

クラークの指摘が正鵠を得ているならば、ヴィーヴリンの新傾向性主義は失敗していることになる²⁴。そして、ヴィーヴリンの新傾向性主義が失敗しているならば、ヴィーヴリンがフランクファートに対して提示した反論は効力を失うことになるだろう。

結論 —— 残された問題

ここまでの議論をまとめておこう。フランクファートの目的は、「ある行為者がある行為に関して道徳的責任を負うのは、その行為者にその行為とは別の行為を行う余地があった場合にすぎられる」という別可能性原理を論駁し、道徳的責任が「実際に行った行為とは別の行為を行う余地があった」という意味での自由、すなわち、余地自由を必要としないことを示すことである。この目的を達成するために、フランクファートは次の二つのことを主張した。第一に、(1) ある行為者 X がある行為 A を行うが、(2) ある要因 F のせいで、X は A とは別の行為を行うことができず、かつ、(3) F は X が A を行うに至るまでの

因果的なプロセスとは無関係である状況、すなわち、無関係状況が存在する。第二に、無関係状況においては、XはAの道徳的責任を負う。実際、フランクファートが考案した事例3はこれらの主張が正しいことを示しているように思われる。これらの主張が正しいならば、無関係状況は別可能性原理の反例であることになるから、フランクファートは自身が掲げた目標を達成したことになる。何度も述べているように、フランクファートのこうした主張は多くの論者に衝撃を与え、事例3のような無関係状況はフランクファート型事例と呼ばれるようになった。

別可能性原理を擁護する論者たちは、フランクファート型事例が別可能性原理の反例になっていないことを示すために、いくつもの反論を提示した。本稿では、その中から、自由の明滅による反論、ウィダカーとケインのジレンマによる反論、ギネットのタイミングによる反論、ヴィーヴリンの新傾向性主義による反論の四つを紹介した。これらの四つを含め、フランクファートに対する反論のほとんどに共通するのは、フランクファート型事例が無関係状況の条件(2)を満たしていないことを指摘している点である。つまり、フランクファート型事例では、別可能性が完全には排除されていないため、フランクファートの意図とは裏腹に、行為者が余地自由を持ってしまうのである。

こうした反論に対して、フランクファートの支持者たちは次のように応答する。たしかに、フランクファート型事例をどれだけ洗練化しても、すべての別可能性を排除し、行為者から余地自由を完全に奪うことはできないかもしれない。しかし、この点はそれほど重要ではない。なぜなら、フランクファート型事例に存在する別可能性は、行為者に道徳的責任があることを説明することができるほど強固な別可能性ではないからである。そのような別可能性が存在するとしても、それはフランクファートに対する反論にはならないだろう。別可能性原理の擁護者たちは、別可能性が存在することが、行為者に道徳的責任があることの根拠であるということを示す必要があるのである。本稿で紹介した応答も、ほとんどがこの種の応答だった。

私はフランクファートの支持者たちのこうした応答は概ね正しいと考えている。しかし、同時に、私はフランクファートの支持者には解決しなければならない問題がまだ残っているとも考えている。それは次のような問題である。たとえ別可能性原理が誤っているととしても、別可能性原理が直観的に正しいように思われることは事実である。また、たとえ別可能性原理が誤っていると、道徳的責任に関連する日常的な実践が別可能性原理に基づいているように見えることは事実である。例えば、我々は自分に道徳的責任がないことを訴えるために、「ほかはどうしようもなかった」や「そうするしかなかった」などの言い回しを使うことがある。フランクファートの支持者たちは、別可能性原理が正しいことに訴えることなく、この事実を説明することができるだろうか。最後に、この問題に関する私の考えを提示しておくことにしよう。

我々がコミットしている道徳的責任の規範には、別可能性原理は含まれない。これはフランクファート型事例によって明らかになった事実である。しかし、我々の多くはこの事

実を知らない。それどころか、我々の多くは「我々がコミットしている道徳的責任の規範には、別可能性原理が含まれている」という誤った信念を持っている²⁴。別可能性原理が誤っているにもかかわらず、別可能性原理が直観的に正しいように思われたり、道徳的責任に関連する日常的な実践が別可能性原理に基づいているように見えたりするのは、このためである。

しかし、自身がコミットしている規範について知らないことがあったり、誤った信念を持ったりすることなどあり得るのだろうか。私はあり得ると思っている。例えば、言語の規範である文法を考えてほしい。日本語のネイティブ・スピーカーであっても、日本語の文法がどのようなものかを説明できるとはかぎらないし、日本語の文法について誤った信念を持つこともあるだろう。同様に、自身がコミットしている道徳的責任の規範について知らないことがあったり、誤った信念を持ったりすることもあり得るのである。

もちろん、ここで示した私の考えは萌芽的なものに過ぎず、問題を解決するためには、もっと詳細に議論を展開する必要がある。とはいえ、私がここで提示した考えは、問題を解決する上で、一つの方針にはなるだろう。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程倫理学専修)

注

- 1 本稿は前半と後半に分かれている。本稿の前半である「フランクファート型事例のその後 (1)」は前号に掲載されている。
- 2 Ginet (1996; 2002).
- 3 ただし、事例9は Ginet (2002, p.307) のものを論旨が変わらない程度に改変したものである。
- 4 事例9のジョーンズに強固な別可能性があると言えるのは、ジョーンズには「T1 にスミスを殺害しない」という行為を自発的に行う余地があり、かつ、「T1 にスミスを殺害しない」という行為は「T1 にスミスを殺害する」という行為よりも善い（悪くない）行為であり、かつ、ジョーンズはこれらのことを理解していたからである。
- 5 「タイミング」(timing) という用語は Pereboom (2012) による。
- 6 Ginet (1996, p.406).
- 7 Pereboom (2012, pp.307-313; 2014, pp.22-27), McKenna and Pereboom (2016, pp.116-120).
- 8 ただし、事例10は McKenna and Pereboom (2016, pp.118-119) のものを論旨が変わらない程度に改変したものである。
- 9 Moore (1912, ch.6). ただし、ムーアが余地自由を定義する際に傾向性の概念に訴えたという解釈は、Vihvelin (2013, pp.196-197) による。
- 10 Vihvelin (2013, p.181, p.197).

- 11 Martin (1994), Lewis (1997). ただし、事例 11 は Lewis (1997, p.147) のものを、事例 12 は Martin (1994, p.2) のものを論旨が変わらない程度に改変したものである。一般に、事例 11 は「密告者の傾向性」(finkish disposition)、事例 12 は「密告者の傾向性欠如」(finkish lack of disposition) と呼ばれている。
- 12 Lewis (1997, p.157).
- 13 Johnston (1992, p.232-234). ただし、事例 13 と事例 14 は Manley and Wasserman (2008, pp.61-62) のものを論旨が変わらない程度に改変したものである。一般に、事例 13 は「覆面」(mask)、事例 14 は「擬態」(mimic) と呼ばれている。
- 14 Manley and Wasserman (2008, p.76).
- 15 Vihvelin (2013).
- 16 Vihvelin (2013, pp.181-186).
- 17 Vihvelin (2013, p.186).
- 18 Vihvelin (2013, p.187, p.190). 実際にはヴィーヴリンによる余地自由の定義はもっと複雑だが、ここでは、見通しをよくするために、いくつかの点を簡略化している。
- 19 Vihvelin (2013, pp.190-191).
- 20 このクラークの主張は公開されていないが、Mckenna and Pereboom (2016, pp.226-227) において紹介されている。
- 21 このタイプの批判を最初に提示したのは Chisholm (1964) である。ただし、事例 15 は Lehrer (1968, p.32) のものを論旨が変わらない程度に改変したものである。
- 22 とはいえ、本稿では触れることはできないが、Vihvelin (2013, pp.196-208) はクラークの批判と同じタイプの批判を取りあげて、それに対する応答を試みている。
- 23 実は、Frankfurt (1969, pp.837-839) 自身はこの問題に気づいていたようである。また、McKenna (2005)、Fischer (2006, pp.203-209)、Sartorio (2013) など同様の問題を論じている。しかし、この問題についての論争はフランクファート型事例そのものをめぐる論争ほどには活発ではないし、多くの論者に重大な影響を与えるほどの主張もなされていない。
- 24 おそらく、注 23 で挙げた論者たちはこの主張を認めないだろう。この論者たちの見解では、我々が「ほかはどうしようもなかった」などの言い回しによって意味しているのは、「私には別可能性がなかった」ということではなく、「ほかはどうしようもなかったという理由だけからそうした」や「悪意はなかった」といったことを意味している。しかし、「ほかはどうしようもなかった」と弁明するとき、我々は本当に「私には別可能性がなかった」ということを意味していないのだろうか。私の考えでは、この論者たちの見解はこの点で疑問が残るものになっている。

参考文献

- Chisholm, R., 1964, "Human Freedom and the Self," The Lindley Lecture; reprinted in G. Watson, ed., *Free Will*, 2nd edn., Oxford: Oxford University Press, 2003, pp.26-37.
- Fischer, J. M., 2006, *My Way*, Oxford: Oxford University Press.

-
- Frankfurt, H. G., 1969, "Alternative Possibilities and Moral Responsibility," *Journal of Philosophy*, 66, pp.829-39. [邦訳：三ツ野陽介（訳）、『選択可能性と道徳的責任』、門脇・野矢（2010）所収]
- Ginet, C., 1996, "In Defense of the Principle of Alternative Possibilities: Why I Don't Find Frankfurt's Argument Convincing," *Philosophical Perspectives*, 10, pp.403-417.
- , 2002, "Review of Living without Free Will," *Journal of Ethics*, 6, pp.305-309.
- Johnston, M., 1992, "How to Speak of the Colors," *Philosophical Studies*, 68, pp.221-263.
- Kane, R., 1996, *The Significance of Free Will*, Oxford: Oxford University Press.
- Lehrer, K., 1968, "Cans without Ifs," *Analysis*, 29, pp.29-32.
- Lewis, D., 1997, "Finkish Disposition," *The Philosophical Quarterly*, 47, pp.143-158.
- Manley, D. and R. Wasserman, 2008, "On Linking Dispositions and Conditionals," *Mind*, 117, pp.59-84.
- Martin, C. B., 1994, "Dispositions and Conditionals," *The Philosophical Quarterly*, 44, pp.1-8.
- McKenna, M., 2005, "Where Frankfurt and Strawson Meet," *Midwest Studies in Philosophy*, 29, pp.163-80.
- , 2008, "Frankfurt's Argument against Alternative Possibilities: Looking beyond the Example," *Notas*, 42, pp.770-93.
- McKenna, M. and Pereboom, D., 2016, *Free Will: A Contemporary Introduction*, New York: Routledge.
- Moore, G. E., 1912, *Ethics*, Oxford: Oxford University Press. [邦訳：深谷昭三（訳）、2011、『倫理学』、法政大学出版局]
- Pereboom, D., 2001, *Living Without Free Will*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2012, "Frankfurt Examples, Derivative Responsibility, and the Timing Objection," *Philosophical issues*, 22, pp.298-315.
- , 2014, *Free Will, Agency, and Meaning in Life*, New York: Oxford University Press.
- Sartorio, C., 2013, "Making a Difference in a Deterministic World," *Philosophical Review*, 122, pp.189-214.
- Vihvelin, K., 2013, *Causes, Laws, & Free Will: Why Determinism Doesn't Matter*, New York: Oxford University Press.
- Widerker, D., 1995, "Libertarianism and Frankfurt's Attack on Alternative Possibilities," *Philosophical Review*, 104, pp.247-61.
- 門脇俊介・野矢茂樹（編集・監訳）、2010、『自由と行為の哲学』、春秋社。